



学内広報

No.1312

2005.4.27
東京大学広報委員会



平成17年度入学式行われる（8～13ページに関連記事）

CONTENTS

| | | |
|---|----|--|
| 特別記事 | 2 | 科原子力専攻の開校式が行われる、教育学部附属中等教育学校で平成17年度入学式行なわれる、「国際地震・火山研究推進室」を開設 |
| 総長就任記者会見行われる、平成17年度大学院入学式行われる、大学院入学式総長式辞、大学院入学式研究科長式辞 高橋宏志法学政治学研究科長、大学院入学式研究科長式辞 廣川信隆医学系研究科長、平成17年度入学式行われる、入学式総長式辞、入学式教養学部長式辞 | | |
| 一般ニュース | 13 | 掲示板 |
| 留学生のための合同会社説明会が開催される | | Amory B.Lovins氏講演会のお知らせ、教養学部進学情報センター主催シンポジウム、特別企画展示「王朝貴族の装束展」のお知らせ、教養学部オルガン演奏会開催のお知らせ、常設展「東大初期洋書教科書の世界」開催のお知らせ、公開セミナー「関野貞アジア踏査」開催のお知らせ、保安教育「低温講習会」のお知らせ、平成17年度保健センター（本郷・駒場・柏支所）の週間診療日程について |
| キャンパスニュース | 14 | 淡青評論 金融の新専攻・センターの誕生 |
| 平成17年度入学者数決まる、平成17年度進学指導担当教員決まる | | 24 |
| 部局ニュース | 17 | |
| 工学系研究科原子力国際専攻が発足、工学系研究 | | |

総長就任記者会見行われる

4月14日（木）14時00分からおよそ60分間、理学系研究科・理学部1号館小柴ホールにおいて、小宮山宏総長の就任記者会見が行われた。

記者会見は、大木康広報委員長の司会により行われ、約1時間にわたり、総長としての任期4年間の抱負と、記者からの質問に答えた。

記者会見終了後には、総長室に移動して、引き続き記者との活発な質疑応答が行われた。



小宮山宏総長



総長室での質疑応答の様子

平成17年度大学院入学式行われる

平成17年度大学院入学式が、4月5日（火）に、大講堂（安田講堂）において挙行された。式は、第一部（9時30分開式）人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科（法科大学院含む）、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部、第二部（11時10分開式）理学系研究科、工学系研究科、農学生命科学研究科、医学系研究科、薬学系研究科、数理科学研究科、情報理工学系研究科の二回に分けて行われた。

式には約2,850名（第一部約1,100名、第二部1,750名）の新入生と、その父母など約1,500名、合わせて約4,350名が出席した。父母控室である法文2号館31番教室、1番大教室及び3番大教室では、モニターを設置し、大講堂での式典の様態を放映した。

小宮山宏総長はじめ理事、各研究科長並びに各研究所長がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、壇上列席者の紹介があった後、総長が約20分にわたって式辞を述べた。

続いて各研究科を代表して、第一部は高橋宏志法学政治学研究科長、第二部は廣川信隆医学系研究科長が式辞を述べた後、式は終了した。



平成17年度大学院入学式の様子

大学院入学式総長式辞

東京大学大学院に入学された皆さん、修士課程から博士課程に進学された皆さんに、東京大学を代表して心からお祝いを申し上げます。皆さんの中には、東京大学を卒業された方も他の大学を卒業された方もおられますし、外国から来られた方、あるいは社会人の経験をお持ちの方、さまざまな経歴の方もおられます。そうした多種多様な経歴をお持ちの皆さんをこうしてお迎えできますことを心から喜んでおります。



本日、皆さんを歓迎する私の式辞は、二つの要素からなっています。ひとつは、大学院で研究し勉強する環境としての知の現状について、第二は、大学の役割と責任の果たし方についてです。

皆さんは、ユーレカという名前のついた図書館やセミナー室が、世界の各地にあるのをご存じでしょうか。ギリシャの時代に、アルキメデスが金の王冠の純度を量る方法、それをお風呂の中で突然考えついて、ユーレカと叫んで裸で飛び出したという故事に基づくものです。ユーレカは分かったという意味です。「分かった」には、授業中に何か今まで分からなかったことを先生から聞いて、「なるほどそうか分かったぞ」という場合や、人の話を聞いて話の脈絡が分かったなど、さまざまな意味があるでしょうが、アルキメデスのユーレカはそういうことではありません。長い間考えたけれども、どうしても分からなかった、あいまいだった、そういうことが明確に分かることです。自分が分かったということが、自分自身にはっきり分かるのです。皆さんは、そうした瞬間、そういう経験をすでにきっとお持ちでしょう。それが貴重ですね。だれが何と言おうとも、自分は分かった、その実感が自信となり、やがて人として、研究者としての自立につながるのだと思います。

分かったというのは、一種の快感だと思います。私自身にとってそれは現在でも生き甲斐のひとつですし、友人の多くもそのように考えています。アルキメデスのユーレカがそうであったように、分かったという至福の瞬間は、多くの場合、苦しい思いの後に前触れもなく突然訪れるのが一般的です。それは、深く深く考えた人にだけ訪れるご褒美のようなものでしょう。皆さんは、多くの学問領域の中から、たったひとつの領域を選択しました。ひとたび選択した以上は、そのことにためらいをもってはいけません。潔く、その領域に深く沈潜してください。それが、分かったという貴重な経験をするための、

おそらく唯一の方法であろうと、私はそう考えておりません。

さて、大学に対する社会からの要請は極めて多岐にわたります。教育と研究は大学の本務ですから、当然でしょう。ところが最近では、産業に貢献しているか、ベンチャー企業を輩出しているか、地域振興の核となっているかといった、さまざまな要請が加わり、それらを社会貢献という言葉でくくり、大学の責任は、教育と研究と社会貢献であると言われるようになっております。しかし考えてみれば、教育も研究もそれ自身が社会における大学の貢献ですから、社会貢献を教育研究と併置することに、私はいささか違和感を覚えます。このことについて少し考えてみましょう。

大学の存在意義は、これまでも陰に陽に常に問われ続けてきております。東京大学はまもなく130周年を迎えますが、その間、何度かの戦争や、高度経済成長といった、その時々歴史的、経済的な状況に応じて、大学はさまざまな要請に曝されて参りました。それが現在は、国際的な経済競争力の問題、高齢化や少子化、過疎化といった問題、環境やエネルギーの問題など、日本の社会が抱える困難を克服するために大学も貢献せよという形をとっているのです。しかしそれに対する私たちの答えは、教育と研究を通じて貢献するということです。つまり、皆さんに立派な人材になって頂き、教職員とともに素晴らしい研究成果をあげて頂くことが大学の本分なのです。したがって社会貢献とはもっと直接的に社会と関われということの意味するわけです。この事態を、私達はどうのように受け止めたらよいのでしょうか。

私には、現在の知の状況に関する本質的な問題が、背景として存在しているように思えます。それは、学術と社会の距離が広がったということです。その原因の一つは、学問領域の細分化という点です。学会の数は、学術会議に登録されているものだけでも900をゆうに越えます。これらは主要な学会のみであって、その他小さな学会がいくつあるのか、見当もつきません。このおびただしい学会の数は、学術の細分化を反映しています。

科学というのは細分化する傾向を本質的に有しているのです。たとえば、ニュートンは運動の法則を発見しましたが、彼はさまざまな運動の中で、考察する領域を、質量で表現できる物質の運動という形に区切ったことで運動の法則を発見しました。メンデレーフの場合は、物質の中で、生物体はもちろんのこと、混合物や化合物なども除外し、あくまでも元素に領域を絞ったことが、周期律の発見につながりました。このように、科学は対象領域を明確に区切ることで発展を遂げてきましたから、科学の高度化というのは必然的に領域の細分化を伴って

きたのです。

新しい知識の多くは、こうした細分化した学問分野で生まれます。研究の先端分野では、精魂傾けて、いわば錐で堅い岩に穴を穿つようにして、新しい知識が産み出されています。一方で社会は、たとえば、環境問題といった包括的な問題への答えを求めたり、あるいは、逆に極めて特殊な生産活動における限定的な知識を求めたりします。したがって、社会の要請が学会から発せられる学術論文だけで満たされる可能性というのは、極めて低いものと考えざるを得ないでしょう。空に向かって投げ上げた針が、岩に錐で穿った穴の中にたまたま収まるといったほどの可能性になってしまっているのです。つまり、これまで大学が伝統的に行ってきた知の発信方法は論文の発表という形でしたが、もはやその形だけで、一般社会に大学総体としての存在理由を確認して欲しいと要求しても無理な状況にあります。大学の研究成果が役に立たないといった声もときに耳にするのですが、研究内容が十分に把握されていないという方が実情に近いのです。

実は、大学の内部においても、他人の研究を理解できないという状況が生じております。理解できないというのは細部の問題ではありません。細部を理解できないのは、昔からおなじで専門が違えば仕方ありません。そうではなく、どういう問題を取り扱っており、何を明らかにしようとしているのかといった本質が理解できないのです。

昔も同じだったのかというとそうではありません。二十世紀には、研究と社会との関係はもっと直接的でした。たとえば、ペニシリンの発見は傷の化膿から人を守り、製薬業を一新させましたし、アンモニアの合成法の発明は肥料産業を創成し、食料の増産を可能にしました。二十世紀以前には、研究成果が人の生活と産業に直結しやすかったのです。現在の先端研究の多くはそうではありません。例えば、工学という私自身の研究分野を考えてみても、ひとつの研究成果が、それだけで経済価値を生むというよりはむしろ、他の多くの科学技術と一体となって、初めて産業に寄与する、そういった性質の研究成果が多くなっております。それが細分化した学術と複雑化した社会との関係の実体なのです。

基礎的な学術分野ではどうでしょうか。今年の一、木星の衛星であるタイタンに探査衛星が到達しました。地球からタイタンへのロケットの運航は、リングが落ちると同じ現象と同じ、ニュートンの運動の法則で支配されております。本日御出席の皆さんの中でも、ニュートンの運動の法則に関する理解の深さは人それぞれでしょうが、ロケットとリングの運動が同じニュートンの法則

で支配されていると言う私の言葉を信じるとすれば、まあそんなものかなと直感できるでしょう。しかし、小柴先生がノーベル賞を受賞されたことで耳にするようになったニュートリノと、物質の根源との関係、これは私には直感できません。

学術と直感、学術と生活、学術と産業、つまり学術と人との距離が遠くなっているのだと思います。この状況は、大学が説明責任を果たすことを困難にしています。しかし、それが知の現状の本質なものですから、知の府である大学自身が、解決に責任を持つべきであることはいうまでもありません。

ところが、大学というのは自律した個人の集団です。研究者は、それぞれの分かったという実感、ユーレカに基づいて、何をすべきかを確信して行動しています。その確信はときには崩れ、変化する場合もあるのですが、その変化も他からの強制によってではなく、主体的になされます。この自律性が学術の発展には不可欠であるということ、人類は歴史の教訓から学んでおります。そうであるとすれば、総長が大学のためになし得ることはほとんどないようにも思えますね。

私は、自律分散協調系という生命体を表現する概念を、大学運営の指針としたいと考えております。例えば、心臓や肝臓といった臓器はからだの中に分散して存在し、それぞれが自律的に動いていますが、互いに協調しており、総体としての人の生命が成立しています。自律分散しつつ協調するというこの概念は、まさに大学のあるべき姿を象徴するものなのではないでしょうか。

人には脳があって神経があります。それによって体の隅々まで情報が共有されているから、自律分散的な要素が協調的に機能し、生命の営みがなされているわけです。大学の中で、研究者どうしがお互いに理解し得ないという現在の状況は、いわば自律分散系に模倣することができるかもしれません。

情報を共有するための最も効率の良い方法は、人が交流をすることです。皆さんは、互いに交流を深め理解し合う努力をしてください。友人間で学問について語り合ったり、他の研究室のセミナーで発言したり、さらには分野の異なる複数の教授を指導教授として要請するといった、さまざまな努力が可能でしょう。それは教員よりも、むしろ、みなさん学生の方がやりやすいという面もあります。教員は、歳をとってだんだん素直にものを尋ねたりしにくいとか、かえって窮屈な面もあるからです。

大学の側も、手をこまねいているつもりはありません。自律分散系に協調の仕組みを持たせるために、たとえば、学術統合化プロジェクトをこの四月一日にスタートさせました。統合の対象の第一弾はヒトです。ヒトに関して、ゲノムという視点からの人、ニューロンという視点から

の人、代謝という視点からの人など、いくつかの視点から、現在の最先端の知識を総動員してヒトを表現します。ヒトの他に、モノ、地球、宇宙を含め、四つのプロジェクトを計画しています。

実は、自然科学のすべての研究は、この四つを座標軸とする四次元空間の領域として表現されるという極めて大胆な仮説を、密かに私はたてております。この企画が成功すれば、全体像の中に個々の研究を位置づけることができます。それによって、学術の細分化により、知の全体像を見失っている私たちが、全体像を構築する手段を得ることになると、そのように考えているのです。大胆な仮説は密かに考えているということですので、細部には立ち入らないことにいたします。

この試みはまさに今スタートしたところですが、さらに密かに期待していることがあるのです。私は自然科学の研究者ですので、自然科学の統合化プロジェクトを企画したのですが、おそらくこれを知った人文科学の皆さんが何らかの動きをされるのではないかと期待しているのです。そうなれば、東京大学は総合大学ですから、学術の全般で統合化の試みが動き始めることになります。

すでに申し上げたように、科学は本質的に細分化する傾向を有しています。私たちは、この細分化という流れに対して、統合化というもう一つの流れを作り出そうとしているのです。それが、世界のリーディングユニバーシティの責任であろうと考えているのです。

さて、始めに申し上げた、本日の二つのテーマ、知の現状と大学の役割、それに関連した東京大学の説明責任の果たし方について、私としての結論を述べましょう。大学の存在理由は、教育と研究、それに加えて、社会における知の焦点になるということだと思ふのです。教育と研究に加える役割は、レンズが光を焦点に集め、焦点からの光が遠く遙かに発せられるように、知の焦点となることなのだと思います。社会が困難を抱えたとき、解は知によって生まれます。社会から人々が集まり、大学人とともに、人類の英知を集めて、新しいコンセプトを産み出す場が大学なのです。それが、大学というものがこれまで果たしてきた、そしてこれからも果たすべき役割なのです。

二十世紀以前は、学術と社会との距離が近かったために、知の焦点としての役割を果たすことが比較的容易だったのです。しかし、学術領域の細分化と社会の抱える問題の複雑化によって、学術と社会が遠くなったのです。このことによって生じる困難を、例えば、学術統合化プロジェクトなどによって克服していきたい。研究を知の全体像の中に位置づけるのです。それは、自律分散的な研究者が主体的に方向を定めることを支援するでし

う、教育の効果を高めるでしょう、そして、社会が抱える問題と人類の英知とを交叉させること、つまり大学が知の焦点となることを容易にしましょう。結局、拡がってしまった学術と社会との距離を、再び接近させてくれるのだと思います。

大学の果たすべき責任は、教育、研究、そして知の焦点となることであると思います。東京大学は、世界が認めるリーディングユニバーシティとして、トップレベルの人材を輩出し、トップレベルの知を生産し続けます。そして、世界の知の焦点として、二十一世紀が抱えるさまざまな困難に対する戦いの、先頭に立ちたいと思います。

皆さん、自らが選択した学問分野に深く沈潜してください。分かったという確かな実感をってください。皆さんが、輝かしい研究成果を挙げられますことを心から祈念いたします。同時に、学術統合化プロジェクトに象徴される、知識を統合し、部分を全体の中に位置づけようとする試みにも注目していただきたい。一つの分野に徹しつつも、頭の中に知の構造を作る努力を意識的に行うことによって、自らの研究の確かな位置づけを行ってください。そして、世界でトップの専門知と幅広い視野とを併せもった、知の先頭ランナーとして、次のステップへと進んで頂きたいと思ふます。

最後になりましたが、本日は多くのご家族の皆さんにもご臨席いただいております。東京大学大学院の入学生、進学生は、知の先頭ランナーとなるべく、私たち教職員とともに、今スタートいたしました。どうか、暖かく見守っていただきますようお願いして、私の式辞の結びといたします。

平成一七（2005）年四月五日

東京大学総長
小宮山 宏



大学院入学式会場（大講堂）

大学院入学式研究科長式辞

高橋 宏志 法学政治学研究科長



東京大学大学院人文社会系研究科、教育学研究科、法学政治学研究科、経済学研究科、総合文化研究科、新領域創成科学研究科、学際情報学府、公共政策学教育部に入学、進学された皆さん、私ども教職員一同は皆さんを心から歓迎いたします。私は、法学政治学研究科長を務めておりますが、法律の中の民事訴訟法という法律を30年以上、教育研究してまいりました。その経験の一端をお話して式辞に代えさせていただきます。式辞というよりも研究科長からの訓辞かもしれません。お話しするのは、学問をすべし、苦しむべし、楽しむべしの3点であります。

その昔、30数年以上前に私が研究室に残して頂いたとき、恩師の新堂先生は修道院に入ったつもりとなれ、と言われました。学問は、昔から日本で言えば東大寺のようにお寺、西欧でいえば修道院で営まれましたから、聞いている私にはさほどの違和感はありませんでした。しかし、続けて、恩師の先生は、世俗の欲望を捨てよ、と言われました。まさに、修道院であります。その意味を、当時の私はよく理解できませんでした。しかし、大変なところに来たという感じはいたしました。その感じは、今でも大事にしております。要するに、学問をせよということに尽きるわけですが、それは学問自体を目的とせよということでもあります。何かのために学問をするのではなく、学問自体を目的とするということでもあります。大学が学問の府である以上、これは当然のことだと考えます。ここには専門職学位課程に入学した人達もおられます。専門職学位課程は、高度専門職業人となるための課程であり修了後は社会に出て活躍することを期待されているのですが、しかし、大学にいる間は専門職学位課程の皆さんも学問をしていただくのであります。大学は、狭い職業教育をするところではありません。

学問をすることは、ときには苦しむことでもあります。学問の最も基本的な部分は、ごまかさないとあります。正直であれ、と言い換えることもできます。自分自身に対して正直であれ、ということです。学問をしておりますと、時に、人によってはしばしば、ごまかすという誘惑に駆られます。たとえば、原典にきちんと当たらずに人の書いたものの引用でごまかす、こういう翻訳でよいのか真剣に検討せずに前例を無批判に踏襲する、そして何よりも自分の考えを突き詰めずに中途半端なところでまとめてしまう、こういうごまかしの誘惑は強いものがあります。これは、自分自身に対して正直で

ないということであり、自分自身に対して恥ずべき行為であります。残念ながらその例が少ないとは言えません。しかし、こういう誘惑に負けては学問ではありません。社会科学でいえば、いわゆる括弧付きの「評論家」と学者の違いはここにあるわけであり、皆さんには東京大学におけるよい意味でのアカデミズムの伝統を是非身に付けて頂きたいのであります。大いに苦しんでください。大学院には小器用な人は向かないのです。昔、高名な詩人は、詩を書くとは、すこしでも体を動かすと痛みを感じずような熱いお風呂に入って堪えに堪えることに似ている、と言いましたが、学問をすることは精神的に疲れるだけでなく、時には肉体的にも苦痛を伴うというのは私の実感でもあります。

しかしながら、だからこそ、学問は楽しいのです。自分の頭で考えることは、人間、だれしも知的に楽しいことでもあります。なにかが理解できたときの喜びは、また格別であります。先人が裸で町中を走り回ったという故事は推奨いたしません、その気持ちはよく分かります。ただ、今日は、学問で楽しむこと以外の楽しみのほうを強調したいのです。自分の専門の学問以外でも、大いに楽しんでください。大学の中には知的に楽しむ場所、機会は無数にあるでしょう。体育館、グラウンドもありますから、スポーツ活動を楽しむこともできます。大学の外にも、楽しむべき場所、機会は多いはずで、自分の仕事だけに時間のすべてを使うのは、そうしなければならない時期もあるでしょうが、基本的にはよくありません。効率的でもなければ、生産的でもないようであります。昔から言う、よく学び、よく遊べであります。一見、逆説的ですが、遊びがあるからこそ学問も伸びるのであります。大きな仕事をした人は、学問一辺倒ではありません。

お話したことは法律学が念頭にありますが、実は、専門の違う新領域創成科学研究科の先生方とお話しても、学問をしている人間同士の共通の雰囲気を感じます。従って、新領域創成科学研究科や総合文化研究科の方々にも、私の話は通ずるはずだと思っております。

繰り返します。学問をすべし、苦しむべし、楽しむべし、であります。

大学院入学式研究科長式辞

廣川 信隆 医学系研究科長



医学系研究科長の廣川です。研究科長を代表してきわめて個人的なメッセージでございますが、一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

まず、大学院に入学される諸君、列席されているご家族に心からおめでとうという言葉を送りたいと思います。諸君の新しい門出を心から祝福します。

これから諸君が研究する自然科学は、大きく基礎科学と応用科学よりなっています。基礎科学には、物質の本質、われらの住む地球、あるいはそれを含む宇宙、生命の仕組み、私たち自身の体の仕組み、あるいは社会の仕組みなど、さまざまな分野がありますし、応用科学には、社会生活がより快適なものとなるような製品の開発、広い意味でのよりよい環境づくり、私たちの健康の増進、疾病の本体の解明、診断、治療法の開発、薬剤の開発、新しい情報手段の開発など、やはりさまざまな分野が存在します。

大きくまとめていえば、これから諸君が携わるのは、新しい知の創造であり、その社会の還元であります。日本は言うまでもなく、資源の少ない小さな島国です。この本日の諸君の中には多く留学生の諸君も含まれていると思います。アジアの国々からの方々、これから発展する国々からの方々が多いことと思います。日本をはじめとして、これらの多くの国々は、21世紀、科学技術立国で立っていくしかない、といっても過言ではないでしょう。この意味で、日本の将来、あるいは留学生諸君にとっては母国の将来は、あなたたちに拠っているのです。あなたがたは、大学を卒業し修士課程あるいは博士課程に入りました。学部までの教育はいわば問題が設定され模範解答がありました。しかし、大学院で諸君は本格的な研究をスタートさせることとなります。学部と違い大学院では自ら課題を設定し答えを出さなければならない。あるいは今までに無い、新しい物を作り上げることを目指さなければならないのです。

私は、この出発点に立つ君たちに、本日二つのメッセージを伝えたいと思います。

まずひとつは、優れた研究を行うには、知力、体力、精神力を含む総合的な力が、必要であるということです。ここで、私は東京大学理学部物理学教授、かつて東京大学が東京帝国大学と呼ばれた時代に、その物理学教授でかつ随筆家であった寺田寅彦氏の随筆『科学者の頭』の一部を紹介したいと思います。少し長くなりますが、この文章には、見事に研究者のあり方につき、非常に優れ

た示唆があるからです。

私の親しいある科学者が、ある日私に次のようなことを語って聞かせた。「科学者になるには、頭がよくなくてはいけない」。これはふつう世人の口にするひとつの命題である。これはある意味では本当だと思われる。しかし一方でまた、「科学者は頭が悪くなくてはいけない」という命題もある。ある意味ではやはり本当である。そうしてこの後のほうの命題は、それを解説する人が比較的少数である。頭のよい人は人より先に人のまだ行かないところへ行き着くことができる代わりに、途中の道端に、あるいはちょっとしたわき道にある、肝心なものを見落とす恐れがある。頭の悪い人、足ののろい人がずっと後から遅れてわけもなくその大事な宝物を捨てている場合がある。

頭の良い人は、あまりに多く頭の力を過信する恐れがある。その結果として自然が我々に表示する現象が自分の頭で考えたものと一致しない場合に、自然の方が間違っているかのように考える恐れがある。まさかそれほどではなくても、そういったような傾向に陥る恐れがある。それでは自然科学でなくなる。

一方でまた、自分の思ったような結果が出ないとき、それが実は思ったこととは別の原因のために生じた偶然の結果でありはしないかという可能性を吟味するという大事な仕事を忘れる恐れがある。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからだめに決まっているような試みを一生懸命に続けている。やっとなんかだめと分かるころには、しかし、たいてい何かしらだめでないほかのもの糸口を取り上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みを敢えてしなかった人には、決して手に触れる機会のないような糸口であることが少なくない。

自然は書卓の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然の真ん中へ赤裸で飛び込んでくる人のみ、神秘の扉を開いてみせるのである。

頭のいい人には恋ができない。恋は盲目である。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ心を打ち明けるものである。

科学の歴史はある意味では錯覚と失策の歴史である。偉大なる迂愚者の、頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

最後にもう一つ。頭のいい、ことに年少気鋭の科学者が科学者としては立派な科学者でも、時として陥る一つの錯覚がある。それは、科学が人間の知恵のすべてであるもののように考えることである。科学は孔子のいわゆる「格物」の学であって、「致知」の一部に過ぎない。しかるに、現在の科学の国土はまだウバニヤドや老子やソクラテスの世界との通路を一筋でも持っていない。芭蕉や広重の世界にも手を出さず通路を持っていない。

そういう別の世界の存在はしかし人間の事実である。理屈ではない。そういう事実を無視して科学ばかりが学

のように思い誤り、思い上がるのは、その人が科学者であるには妨げないとしても、認識の人であるために少なからざる障害となるのである。これも、わかりきったことのようにしばしば忘れがちなことであり、そうして忘れてはならないことのひとつであると思われる。寺田寅彦博士の、「先入観を持たずに自然の中へ赤裸で飛び込んで行け。科学者はある意味で頭が悪くなくてはいけない。亀のように地道な努力を忘れるな」という言葉は、東京大学で学ぶ者にとって重要な示唆に富んだものであると思います。

二つ目の私のメッセージは、自らのアイデンティティを確立してほしいということです。科学研究の世界、とくに自然科学の分野では、国際的に通用するスタンダードが必要です。同時に激しい国際競争があります。真実を言えば、政治経済は言うに及ばず、科学の分野でも米国は大変戦略的な国家であり、セルフセンタリングな国であると言えます。

米国に追従することなく、自らのオリジナリティを大事にして、それを育て、しかし国際的に通用する第一線の研究を行ってほしいと思います。東京大学は、国内のリーダーだけでなく、世界のリーダーとして、先駆的情報を発信すべき立場にあり、またそれを目指しています。

私事になりますが、私が東大に入学した昭和39年に、東京オリンピックがありました。そのとき、日本人選手は大活躍し、多くの金・銀・銅メダルを獲得しました。今から振り返ると、その選手たちは、無理に無理を重ね、血のにじむ努力を積み重ねていたように思います。しかし、去年のアテネオリンピックでの水泳の北島康介選手をはじめ、マラソン、柔道など日本人選手の活躍が非常に目立ちました。女性選手の活躍もすばらしかったです。大変な努力のもとに、しかし自然体で自分自身に自信を持ち、競技を楽しんでいたように思います。これこそが日本の新たな若者の力であり、希望であると私は思いました。

科学についても同じく、東京大学には世界の先端に行く多くの研究があります。また、比較的キャッチアップする段階である分野もあるでしょう。どのような分野にあっても、自分を正しく見つめ、自分のアイデンティティとオリジナリティを大事に、自然体で、しかも研究を大いに楽しんでください。

21世紀の自然科学では、日本の、またアジアの果たす役割は大変大きなものになるだろうということを確信しています。君たちの新たな門出を心より祝し、これからの研究生活が充実したものであることを祈って、私の祝辞といたします。

平成17年度入学式行われる

—3,167人の新入生が誕生

平成17年度入学式が4月12日（火）に、日本武道館において挙行された。式には約2,900人の新入生と、その父母など約5,100人、合わせて約8,000人が出席した。

9時45分、運動会応援部による演舞及び昨年度「東京大学の歌」として位置づけられた「ただ一つ」の練習があり、10時18分、音学部管弦楽団によるワーグナー作曲の「ニュールンベルグのマイスタージンガー前奏曲」の演奏後、小宮山宏総長はじめ理事、各学部長、各研究科長、各研究所長並びに来賓の小柴昌俊特別栄誉教授、藤嶋昭特別栄誉教授、及び経営協議会学外委員の方々がアカデミックガウンを着用のうえ登壇し、10時40分開式となった。

式はまず、音楽部管弦楽団、音楽部コールアカデミーの現役およびOBにより、「ただ一つ」と同様に昨年度「東京大学の歌」として位置づけられた「大空と」の奏楽、合唱があった。合唱後、総長が約20分にわたって式辞を述べ、続いて、木畑洋一教養学部長が式辞を述べた。二人の式辞の後、アメリカ・ハーバード大学の学生からお祝いのメッセージ（ビデオレター）が放映され、最後に運動会応援部のリードにより新入生をまじえ全員で東京大学の歌「ただ一つ」の奏楽、合唱をもって、11時35分に式を終えた。

なお、今年度の入学式より、「東京大学の歌」の合唱、「ただ一つ」合唱時の武道館内モニターによる映像・歌詞の映写、コミュニケーションセンターによるUTグッズの販売を行った。



入学式での合唱の様子

入学式総長式辞

本日入学された皆さんに、東京大学を代表して心からお祝いを申し上げます。本当におめでとうございます。東京大学は、創立127年、世界に認められたリーディングユニバーシティの一つです。人生は一生が学びの過程、成長の過程ではありますが、皆さんが東京大学で過ごすこの4年間は、自己を確立していく上で、特に大切な時期だと思います。そうした皆さんに今日お話しするのは、21世紀という時代が要求する、大学と人についてです。



21世紀の幕開けを迎えて間もない今、私たちがどのような状況にいるのかを考えるために、20世紀が人類にとって何だったのかを、振り返って見ましょう。20世紀は戦争の世紀、イデオロギーの世紀、あるいは、科学の黄金時代であったなど、いろいろな見方が可能でしょう。私は、膨張の世紀、つまり人類の活動が未曾有の発展を遂げた世紀という観点からお話をします。

20世紀、百年の間に、世界の人口も、産業の生産も著しく増大しました。このことは、人類の活動が活発になったということであって、人類の繁栄を意味するでしょうが、その一方で、環境の劣化という深刻な問題を引き起こしました。しかし、人類の活動の増大や環境劣化が20世紀固有の現象かというのと、そのようなわけでもありません。数百万年前、アフリカで最初の人が誕生したといわれています。その人類の誕生以来、ほぼ一貫して人口は増え続けているわけです。環境問題にしても、産業革命当時のロンドンにおける環境の劣化はひどいものでした。20世紀以前にも多くの環境問題が世界各地で発生していたのです。

そうだとすれば、いったい、20世紀の膨張は、どのような意味で未曾有であったといえるのでしょうか。その答えは、人間の活動が、ひとつの都市やひとつの湖といったような地球の部分、部分にとどまらず、地球を全体規模で変え始めたということです。象徴的には、大気中の二酸化炭素濃度が増加し、地球温暖化が始まりました。つまり、大気の温度という、水惑星地球を成立させている最も重要な因子が一大変化を蒙り始めています。私たちの活動が、私たちの活動の基盤そのものを揺るがすほどに膨張した、これが、20世紀だったのです。20世紀があらわにした、この「有限の地球」という命題を、深く心にとどめて、21世紀の行動を選択する必要があります。このことは、いくら強調しても、しすぎることはないでしょう。

今お話ししたのは、環境や資源に関する問題で、皆さんもすでにご存じのことです。しかし、よく考えてみます

と、20世紀に最も膨張したものは、実は知識あるいは情報なのではないか。私はそのように考えます。勿論、知識・情報が増えたことそれ自体は、歓迎すべきことです。しかし一方で、あまりに増えすぎたために、知識の全体像を把握できなくなってしまった、そうした問題が生じています。人間の物質的な活動の増加が環境問題を引き起こしたように、知的活動の進展が、知識の全体像や、社会的な問題の全体像の把握を困難にさせるといふ、負の側面をもたらしたのです。皆さんはこれから、いわば、知識の洪水に曝されることになるのです。しかしそれは、皆さんだけの問題ではありません。人類すべてにとって、さまざまな意味で、全体像を把握することが困難になっているのです。

全体像を把握することが難しくなったということを表す事例として、2000年に起きたコンピューターの二千年問題があります。コンピューターの中で、年号は下二桁で表現されていました。1935年なら35、1988年なら88、といった具合です。メモリーの値段が高かったから節約をして、二桁ですませたのです。2000年になって、そのつけが回ってきました。2000年の下二桁は00です。しかし、1900年も00ですから、コンピューターは1900年から2000年か分からなくなってしまいます。その結果、コンピューターで制御されているさまざまな機器が混乱を起し、社会が大混乱に陥るといふ心配が生じました。これがコンピューターの二千年問題です。車の運転が不能になる、飛行機もエレベーターもおかしくなる、電気やガスが誤作動を起こす、病院の医療機器も、銀行のATMも、商店のレジも、工場も、さらには、ミサイルが誤って発射される可能性まで心配されました。結果は、銀行の自動貸し出し機が少し混乱した程度で、幸い深刻な事態には至りませんでした。結果はたいしたことはなかったのですが、この問題は人類にとって極めて大きな歴史的意味を持っています。それは、世界中にたった一人として、情報社会の全体像を把握できる人がいなくなったということ、それが事実をもって明らかにされたということです。

現在、人類は多くの問題に直面しています。民族問題、貧困の問題、テロリズムの問題、地球環境問題、エネルギー資源の問題、高齢化社会の問題、過疎の問題、大都市に付随する数々の問題など、文字通り枚挙に暇がありません。いまこそ英知を結集して、こうした問題の解決にあたらなければなりません。ところが、20世紀に知識が爆発的に増えた結果、かえって、私たちの最大の武器である知を有効に使えないというジレンマに陥っているように思われます。社会的な問題の全体像を把握し、知識の全体像を把握し、知によって問題を解決する、そのことが困難になってきているのです。つまり、私たちが抱えるさまざまな困難の背景には、全体像を把握できな

くなったという、知に関する基本的な問題が潜んでいるのです。

東京大学は、世界の先進大学として、時代の困難に立ち向かう使命感を感じております。皆さんも東京大学の一員として、そうした使命感を共有して頂きたい。そして、やがては、人類の困難に立ち向かう先頭に立つ人になっていただきたい、そのように期待してやみません。そうした期待に答えてゆくためには、さまざまな課題が皆さんに求められます。基礎的な学力を身につけろ、専門をしっかりマスターせよ、幅広く物事を理解する人になれ、英語に堪能になれ、包容力のある人になれといった、皆さんにしてみれば矛盾とも思われるような、さまざまな要請がふりかかることになります。しかし、先頭に立つということは、自分で道を決めるということですから、それだけ重大な責任を背負うことになり、なによりも問題の全体像を把握する能力が要求されます。全体像を把握しないと、ビジョンを描けないし、正しい道か、誤った道か判断することができないからです。

こんな風にいわれると不安に駆られるでしょうか。知識が爆発的に増えた。その全体像を把握しなければならぬ。いったい、自分にそのようなことが可能なのだろうか、そういった不安に駆られるでしょうか。こうした不安は、深くものを考える人であれば、共有する不安です。しかし、本気で、そうした要請に応える挑戦をして欲しいのです。専門性が一般性か、基礎か応用か、英会話か英文学かといった、二者択一ではなく、二つを両立することを追い求めて欲しいのです。

皆さんがこれから直面し、おそらく皆さんをもっとも悩ませるであろう本質的な矛盾は、広く学べと深く学べ、この二つの間の矛盾でありましょう。私は、「広く」と「深く」の両立は可能だと思います。それには、ひとつで良いから深く学ぶこと、同時に、頭の中に全体像を作るという明確な意識をもつこと、この二点が肝心なのです。

まず、ひとつでよいですから深く学んでください。ひとつの分野を深く学ぶと、その分野が分かるというだけでなく、同時に他の分野を理解する力も増します。ところが、浅くても良いから広く学ぼうとすると、ものごとの本質をつかむ力を得ないままに終わってしまいがちなのです。

さて、私は、深く学ぶと同時に、全体像をつくるという意識を、明確にもつことをお勧めします。深く学ぶというだけでは、専門分野のことしか分からない人になってしまう心配があるからです。深い専門分野を有し、しかも他の学問分野や、社会のさまざまな事象を幅広く理解できる人になる道は、頭に全体像を描くことを、無意識ではなく、意識的に行うことではないかと、私はそう考えています。例えば、ひとつの教科なら、その教科はいったい何を対象としていて、それをどのような方法

で取り扱い、社会や自然とどのような関係にあるのか、細部は臆気でもよいですから、全体像を、意識的に構築しようとするのです。社会問題に対しても全体像を意識するのがよいと思います。たとえば、先ほど例として示したコンピューターの二千年問題にしても、その全体像が把握できればあのようなことにはならなかったのです。

最初のうち、全体像は茫洋としています。それは仕方ありません。これから履修する教科の全体像を描くのは容易ではありません。しかし、大丈夫です。全体像を意識して学びを進めるうちに、しだいにそれはできていきます。そして、教科の全体像、教科群の全体像、社会問題の全体像など、さまざまな全体像が、相互に関係を持ち出します。それがそれぞれの人の頭の中に生じる、知の構造でありましょう。

私の頭の中にも、さまざまな全体像があり、総体としての知の構造があります。この構造は、昔より今の方が大きさと鮮明さが、多少はましになっていると思いますが、しかし今でも、あちらが壊れたり、こちらを改修したり、変化し続けています。それは私にとって、大いなる喜びであり、生きがいのひとつです。

申し上げたいのは、知識が爆発的に増えた現在における学び方についてです。皆さんは、学ぶということ、高い山を、重い荷物を背にしょって一步一步、一合目、二合目と、脇目もふらずに頂上まで登る、そのようなイメージで考えているのではないのでしょうか。私のイメージは、ひとつの山の頂に向けて一步一步登りつつも、時にはヘリコプターでいきなり山頂に立ってみたり、隣の山の麓を散策してみたり、外国の都市に遊んでみたり、人工衛星から俯瞰してみたり、潜水艦で深海に潜ってみたり、全体の構造を縦横無尽に動き回りながら、ひとつの山の頂を目指す、そうしたイメージなのです。それが、「深く」と「広く」を両立させる道である、自己と全体をとともに把握する道であると、そのように考えています。東京大学としても、学術俯瞰講義、学術統合化プロジェクトなど、教育と研究の両面において、21世紀における、時代の問題である、知の全体像を把握するための挑戦を行っていきます。

しかしここでひとつ、忘れてはならない、大切なことがあります。皆さんは、今日から東京大学の一員として、知の世界への冒険と挑戦の旅を始めることとなりますが、それは決して、ひとりぼっちの旅ではありません。多くの人との出会いの場なのです。ところが、皆さん方の世代がゲームや携帯音楽やコンピューターなど、ひとりの世界に閉じこもって、人と人との関わり合いが薄くなってきていることを、私は憂慮しています。人生とは、と大上段に振りかぶって語ることは、私の得意とするところではありませんが、しかし、人との関係が人生でし

よう。人との関係を持たないということは、人生を生きないということに近いのではないのでしょうか。人との関わり合いを通じて、私たちには、「他者を感じる力」が備わってくるのではないのでしょうか。

初めての人と関わりをもつことは、怖いことでもあります。いつでもよい関係をつくれるとは限らないからです。相手も同じなのです。怖いからといって、表面だけのつきあいですませてしまえば、人間関係の醍醐味は味わえません。真の友情や愛といったものは生まれません。はじめは、ぎこちない関係から始まるのが普通でしょう。そのぎこちなさを恐れるために、そして、ゲームや携帯音楽やら、ひとりの世界に閉じこもる手段が安易に手に入る状況であるために、逃避する人が多くなるのでしょうか。けんかをしたって良いではないですか。それも人間同士の関わり合いです。クラスの友人と、踏み込んだつきあいをしてください。そのために大学は、授業や演習や実験や、夏休みや、サークル活動や、さまざまな機会を提供しています。それらは、それら自身が学びの手段であると同時に、皆さんに熱いつきあいの機会を提供する媒体でもあるのです。

これから始まる学生生活というのは、自由という点で、高校生までの生活とは相当に異なったものになります。皆さんにとって無限の可能性を秘めているとあって過言でないでしょう。大切なことは、どんな4年間になるのか、それを決めるのは皆さん自身の意志によるところが極めて大きいということです。決して、閉塞的にならないでください。

関係を持つ人の範囲も思い切って広げてください。人との関わりは、それが多様な人との関わりであるほど成長の糧となります。学んだ分野や育った環境が異なると、同じ問題でも異なる視点から捉える場合がしばしばあります。

例えば、人といってもさまざまなとらえ方があります。人生を生きる人、肉体を持つ人、考える人、病気になる人、歴史の登場人物、人種など、さまざまな視点があります。ここで私は、人生を生きる人を考えるのが文学部の人の視点で、病気になる人考えるのが医学部の人の視点である、などと申し上げているのではありません。また、教員が成熟していて、皆さんが未成熟などというつもりすらまったくないのです。人というのは、そのような定型的な分類や予断を許さない、意外性に満ち、相互に影響を及ぼし合い、変化していく、誠に魅力的な存在なのです。ゲームや漫画の主人公などとはまったく異なるのです。だからこそ人との関わりは何ものにも代え難い、人生を豊かにするものなのですし、人と関わらないというのは人生を生きないということにほとんど等しいのではないかと、私がそのように考える理由なのです。人との関わりを通じて、「他者を感じる力」を備えた人

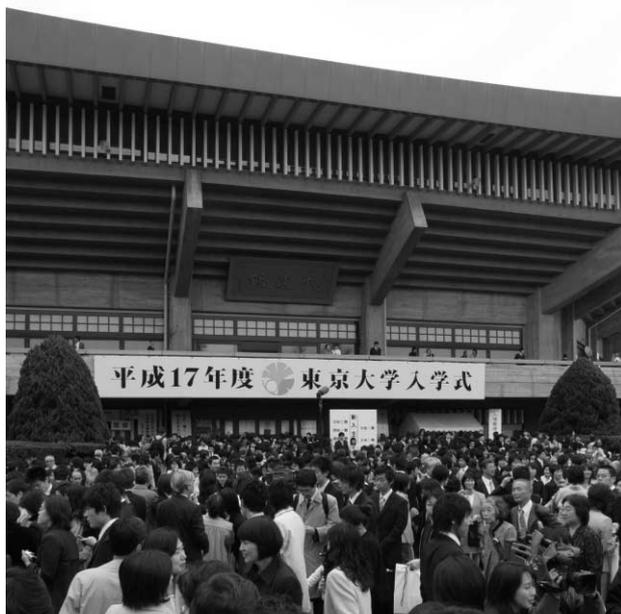
になってください。

さて、そろそろまとめに入りましょう。私は今日の話の前半で、知識の洪水に溺れるな、専門を深く学べ、同時に、頭に知の構造を作れ、そうお話ししました。それは、21世紀という時代において、問題の本質をつかむ知を養えということでもあります。人類は様々な困難に直面しています。それらは知によってのみ解決可能なのであり、知によってのみ人類の未来は開けるのです。そして、知を行動につなげる勇氣は、自分は本質をつかんでいるという確信があってこそ生まれるのです。そうした人を、時代が求めています。東京大学、そこに集う私自身を含めた教職員は、世界の先進大学として、時代の困難に立ち向かう使命感を感じております。私たちの使命感を、現実に社会を動かす力とするためには、先頭に立って一歩前に踏み出す勇氣を持つことが必要でしょう。人類にとって必要なもの、東京大学の役割、そして、皆さんに期待するところ、これらは実は全く同じなのです。東京大学で学ぶ中で、「本質を捉える知」、「他者を感じる力」、そして、「先頭に立つ勇氣」を、是非育ててください。

最後になりましたが、本日ご列席のご家族の皆さん、お子さん達は今、社会へ向けての旅立ちの第一歩を踏み出しました。是非、暖かく見守って頂きますようお願いしまして、本日の式辞の結びといたします。

平成一七（2005）年四月一二日

東京大学総長
小宮山 宏



入学式会場（武道館）前

入学式教養学部長式辞

新入生の皆様、東京大学へのご入学おめでとうございます。またご家族の方々など、新入生の皆様を支えてこられた方々にも、心からお慶びを申し上げます。

私は、新入生の皆様が大学生活で最初の二年間を過ごされる教養学部を代表して、皆様に歓迎の意を表したいと思います。



皆様ご存知のように、教養学部のキャンパスは目黒区の駒場にあります。現在東京大学には、本郷と駒場、それに最も新しくできた千葉県の柏という三つの大きなキャンパスがあります。その中の一つ、駒場キャンパスで皆様はこれから少なくとも二年間学ばれるわけです。私は、ここでまず駒場キャンパスの教養学部について簡単に説明し、それから皆様方の大学生活のはじまりに際して私がぜひお願いしておきたいと思っている点を、述べてみたいと思います。

今、少なくとも二年間といいましたが、それは、皆様方の中に、駒場キャンパスで三、四年生の課程に進み、さらに大学院に進まれる方も少なからずいらっしゃるはずだからです。皆様方がこれから属することになる一、二年生の課程は、教養学部の前期課程といいます。教養学部はその前期課程と三、四年生の後期課程とから成っています。また駒場にある大学院は総合文化研究科と呼ばれます。学生の数としては、何といても皆様を含む一、二年生が一番多いわけですが、後期課程の学生も400人余り、大学院の学生も約1,400人います。全部で9,000人近い学生が学ぶキャンパスで皆様方はこれから大学生活を送られるわけです。

皆様もよく承知されていると思いますが、東京大学では入学する時点で専門分野を決めるということはしておりません。皆様は、文科一類から理科三類まで六つある科類のいずれかに所属されるわけで、それぞれの科類は将来皆様が進学するはずの学部と一定の対応関係はもっていますが、皆様は自分の科類に最も密接に対応する専門課程以外のところにも進んでいくことができます。それが可能なように、教養学部の前期課程ではきわめて多様な学問分野にわたる数多くの授業が提供されています。皆様は、それらの授業を通して、また自分たちの主体的な学習を通して、広範な学問のあり方に触れ、自分が進んでいくべき専門分野を自分で選び取っていくことができるのです。

教養学部前期課程における授業は、駒場の大学院総合文化研究科・教養学部に属する先生方の他、本郷キャンパスや柏キャンパスなど東京大学の他の部局の先生方、

さらに東京大学以外からおみえになる先生方など、大勢の方々によって担われています。学問の最先端を追求しているこうした先生方による授業から、皆様方が自分の進んでいくべき道についての指針を得られることを期待しています。

次に、このような教養学部に入ってこられた皆様に、入学式にあたって私がお願いしておきたいことを述べたいと思います。

まず申し上げておきたいのは、幅広い知的好奇心をもっていただきたいということです。知的好奇心をはばたかせて、駒場キャンパスで学ぶ時代にいろいろな学問に接していただきたいと思います。今述べたように、教養学部では多様な学問領域にわたる多数の授業が開かれています。そのなかには皆様にとっての必修授業もありますが、多くは皆様が自分で選択してとれる授業です。第一線の研究を行っている先生方に支えられたとても贅沢な環境が皆様の前に開かれています。皆様の内には、自分の関心がある分野をすでにはっきりともっている方もあれば、自分の関心がどこにあるのか自分でもまだ分からないという方もいらっしゃると思いますが、そのどちらであれ、こうした豊かな環境を利用してさまざまな学問分野に触れてみて下さい。それによって、すでに自分の関心が定まっていると考えていた方の興味のありか変化したり、関心の焦点が絞れていなかった方が本当に関心のもてる領域を見出したりすることがあるでしょう。

知的好奇心をもっていただきたいのは、もちろん授業の場に限られません。皆様の身の回りの社会で生じていること、日本の各地で展開していること、そして世界の遠く離れたところで起こっていることに、眼を向けて下さい。とりわけ世界に向けた知的好奇心をはぐくんでいただきたいと思います。現在は、インターネットのおかげで、世界の各地とすぐに連絡することができます。グローバル化という動きのなかで、とりわけ経済面を中心に世界の一体化は進んでいるといわれます。また皆様の多くは、東京大学に在学している間に外国に旅行したり、留学されたりすることだろうと思います。こうして世界の各地は近くなっているわけですが、その一方で世界の動きについて貪欲に知ろうとする姿勢が、学生の方々間で必ずしも強くないという感じを、私は抱いています。自分たちとは違った生活様式や価値観、異なる歴史的経験や記憶をもった人々が暮らしている場と、そこで起こっていることに対して、知的好奇心を働かせて下さい。

また、知的好奇心をもって、できるだけいろいろな本を読んでいただきたいと思います。授業のなかで先生から紹介される本もたくさんあるはずですし、教養学部の教員が中心になって執筆した『教養のためのブックガイド

ド』という出版されたばかりの新しい本もいい手になりになるでしょう。ちなみにこの『教養のためのブックガイド』のなかには、「読んではいけない本」という章もあります。なぜ「読んではいけない」とされているのかは、このブックガイドに直接当たって確かめてもらいたいと思います。それはさておき、こういった形で誰かから推薦されたり薦められたりした本を読むことに加え、自分の知的好奇心のおもむくままに自分で主体的に本を選んで読んでいくという姿勢も、身につけてもらいたいです。そのためには、図書館や書店であちこちの書棚を見回して気になる本を見つけ出して読んでみるということをお勧めします。そのようにすることをあらかず適当な日本語は思いつかないのですが、英語ではブラウズといいます。駒場キャンパスには二年半前にできたまだ新しい図書館がありますが、そこでぜひブラウズしてみてください。

今、自分で主体的に本を選んで下さいと申しました。私がこの入学式に当たって、新入生の皆様に次に申し上げておきたいことは、この主体的な選択ということの重要性です。今までの生活においても、皆様は自分で主体的に選び取ったり決断したりするということがされてきたと思いますが、大学の生活ではそれがますます大切になります。さきほど触れたように駒場で多様な授業から自分のとる授業を選んでいく際にも、皆様は主体的な選択をするわけです。誰かによって決められたり与えられたりしたものをなぞっていくのではなく、多くの選択肢のなかから自分で選ぶのです。問題は他の誰でもなく、皆様方一人一人の自分なのです。主体的に何かを選んでいくためには、選ぶ対象についてのさまざまな情報を収集したり、それについていろいろと考えをめぐらしたりすることが必要でしょう。友達などとの議論もきっと役に立つことと思います。授業の選択にせよ、進路の選択にせよ、自分で納得がいく準備をした上で、自分で主体的に選んでいくこと、そして自分が選んだことについてはあくまでも自分が責任をもっていくことが大切だと思います。

これからの大学生活をどのようなものにしていくかは、まさに皆様自身の主体的な選択にかかっているのです。この点を強調して、私のお祝いの挨拶を終わらせていただきたいと思います。

平成一七（2005）年四月一二日

東京大学教養学部長
木畑 洋一

留学生キャリアサポート室 留学生のための合同会社説明会が開催される

4月9日（土）、16日（土）、本学で初の試みである「東京大学留学生のための合同会社説明会」が、御殿下記念館ジムナジウムで開催された。留学生の日本国内での就職意向の高まりを受け、本学では昨年10月に留学生のための就職支援専門部署である「留学生キャリアサポート」を設置し、就職に関する留学生への情報提供や、企業に対する協力要請を行ってきた。今回の合同会社説明会は、留学生の採用に特に熱心な企業（松下電器産業株式会社、富士通株式会社、株式会社東芝、他）が参加し、自社の事業内容や勤務条件、採用方法などを留学生一人ひとりに面談をしながら紹介する形式で実施された。4月9日（土）は88名、4月16日（土）は83名の留学生が参加し、会場は終了の17時を過ぎても順番を待つ留学生で賑わった。

次回は5月14日（土）12時から17時まで、同じく御殿下記念館ジムナジウムで開催予定である。お問合せ、参加申込みは、<http://nw.nc.u-tokyo.ac.jp/mailmag/>にて。



各企業担当者の講演を熱心に聞く留学生



企業ブースの様子

学生部

平成17年度入学者数決まる

平成17年度新入生の人数は、次のとおりである。

| 科 類 | 入学定員 | 合 格 者 数 | | | 入 学 辞退者数 | 入学者数 | 募集人員 との差 | 定員外の入学者数 | | 入学者 総数 |
|------|------------------|------------------|---------------|------------------|-------------|------------------|--------------|------------|---------------|------------------|
| | | 一般選抜 | 特別選考 (第2種) | 合 計 | | | | 国費留学生等 | 特別選考 (第1種) | |
| 文科一類 | 415 (415) | 416 (416) | 5 (5) | 421 (421) | 0 (0) | 421 (421) | +6 (+6) | 4 (3) | 1 (1) | 426 (425) |
| 文科二類 | 365 (365) | 367 (367) | 4 (3) | 371 (370) | 1 (1) | 370 (369) | +5 (+4) | 2 (3) | 3 (3) | 375 (375) |
| 文科三類 | 485 (485) | 489 (488) | 4 (4) | 493 (492) | 1 (3) | 492 (489) | +7 (+4) | 8 (9) | 0 (2) | 500 (500) |
| 理科一類 | 1,147 (1,147) | 1,171 (1,163) | 5 (4) | 1,176 (1,167) | 1 (10) | 1,175 (1,157) | +28 (+10) | 22 (14) | 5 (6) | 1,202 (1,177) |
| 理科二類 | 551 (551) | 569 (564) | 3 (3) | 572 (567) | 1 (9) | 571 (558) | +20 (+7) | 0 (0) | 3 (3) | 574 (561) |
| 理科三類 | 90 (90) | 90 (90) | 0 (0) | 90 (90) | 0 (0) | 90 (90) | 0 (0) | 0 (0) | 0 (0) | 90 (90) |
| 合 計 | 3,053 (3,053) | 3,102 (3,088) | 21 (19) | 3,123 (3,107) | 4 (23) | 3,119 (3,084) | +66 (+31) | 36 (29) | 12 (15) | 3,167 (3,128) |

(注) 1. () 内は、昨年度を示す。

2. 国費留学生等の人数には、国費留学生の他に政府派遣留学生、日韓共同理工系学部留学生を含む。



学生部

平成17年度進学指導担当教員決まる

教養学部（前期課程）から専門分野へ進学しようとする学生に対し、進学に関する諸問題について個人的な指導や相談にあたる今年度の進学指導担当教員は、次のとおりである。

平成17年度進学指導担当教員名簿

平成17年4月現在

| 学 部 | 進学指導担当学科 | 職 名 | 氏 名 | 連絡先（内線） |
|----------|--------------|-------|-----------|---------------|
| 法 | 全類 | 教 授 | 馬場 康雄 | 2 3 2 1 9 |
| 医 | 医学科 | 教 授 | 栗原 裕基 | 2 3 4 9 5 |
| | 健康科学・看護学科 | 教 授 | 數間 恵子 | 2 3 5 0 6 |
| 工 | 社会基盤学科 | 助教授 | 中井 祐 | 2 6 1 3 4 |
| | 建築学科 | 助教授 | 西出 和彦 | 2 6 1 6 8 |
| | 都市工学科 | 講 師 | 大森 宣暁 | 2 6 2 3 2 |
| | 機械工学科 | 教 授 | 笠木 伸英 | 2 6 4 1 7 |
| | 産業機械工学科 | | | |
| | 機械情報工学科 | 教 授 | 中村 仁彦 | 2 6 3 7 9 |
| | 航空宇宙工学科 | 教 授 | 李家 賢一 | 2 6 5 9 5 |
| | 電気工学科 | 助教授 | 古関 隆章 | 2 6 6 7 6 |
| | 電子情報工学科 | 助教授 | 苗村 健 | 2 6 6 6 8 |
| | 電子工学科 | 助教授 | 池田 誠 | 2 6 6 6 1 |
| | 物理工学科 | 教 授 | 藤原 毅夫 | 2 6 8 1 0 |
| | 計数工学科 | 教 授 | 竹村 彰通 | 2 6 9 4 0 |
| | | 教 授 | 安藤 繁 | 2 6 9 2 5 |
| | マテリアル工学科 | 教 授 | 渡邊 聡 | 2 7 1 3 5 |
| | 応用化学科 | 助教授 | 大越 慎一 | 2 7 2 4 8 |
| | 化学システム工学科 | 助教授 | 大久保達也 | 2 7 3 4 8 |
| | 化学生命工学科 | 助教授 | 小宮山 真 | 5 5 2 0 0 |
| システム創成学科 | 助教授 | 陳 昱 | 2 6 9 8 9 | |
| 文 | 全学科 | 助教授 | 吉澤誠一郎 | 2 3 7 3 2 |
| 理 | 数学科 | 助教授 | 細野 忍 | (駒場・数理) 48327 |
| | 情報科学科 | 教 授 | 辻井 潤一 | 2 4 0 9 8 |
| | 物理学科 | 教 授 | 宮下 精二 | 2 4 1 9 2 |
| | 天文学科 | 教 授 | 野本 憲一 | 2 4 2 5 5 |
| | 地球惑星物理学科 | 教 授 | 山形 俊男 | 2 4 2 9 7 |
| | 化学科 | 教 授 | 太田 俊明 | 2 4 3 3 1 |
| | 生物化学科 | 教 授 | 坂野 仁 | 2 4 3 9 6 |
| | 生物学科（動物学） | 教 授 | 岡 良隆 | 2 4 4 3 8 |
| | 生物学科（植物学） | 教 授 | 中野 明彦 | 2 4 4 6 9 |
| | 生物学科（人類学） | 講 師 | 井原 泰雄 | 2 4 4 8 3 |
| | 地学科（地質学・鉱物学） | 教 授 | 宮本 正道 | 2 4 5 4 3 |
| 地学科（地理学） | 助教授 | 池田 安隆 | 2 4 5 7 4 | |
| 農 | 一類 | | | |
| | 応用生物学専修 | 助教授 | 山下 修一 | 2 5 0 9 2 |
| | 環境生物学専修 | 教 授 | 田付 貞洋 | 2 5 0 6 0 |
| | 緑地環境学専修 | 助教授 | 吉田 薫 | 2 8 0 8 6 |
| 生産生物学専修 | 教 授 | 田付 貞洋 | 2 5 0 6 0 | |

| | | | | |
|----------|--|--------------|----------------|------------------------|
| 農 | 二類 生命工学専修 生命化学専修 | 助教授 講 師 | 有岡 学 阿保 充 | 2 5 1 6 2 2 5 1 5 6 |
| | 三類 森林生物科学専修 森林環境科学専修 森林資源科学専修 | 助教授 | 久保田耕平 | 2 5 2 2 7 |
| | 四類 水圏生命科学専修 水圏環境科学専修 水圏生産科学専修 | 教 授 | 阿部 宏喜 | 2 5 2 9 6 |
| | 五類 比較農業・経済学専修 開発政策・経済学専修 | 教 授 助教授 | 谷口 信和 斉藤 勝宏 | 2 5 3 2 9 2 5 3 1 9 |
| | 六類 地域環境工学専修 生物システム工学専修 | 教 授 助教授 | 塩沢 昌 富士原和宏 | 2 5 3 4 4 2 5 3 5 4 |
| | 七類 環境共生システム学専修 植物資源プロセス学専修 | 教 授 助教授 | 太田 正光 竹村 彰夫 | 2 5 2 4 8 2 5 2 6 8 |
| | 八類 獣医学専修 | 助教授 | 堀 正敏 | 2 5 3 9 3 |
| | 九類 国際開発農学専修 フィールド科学専修 | 教 授 助教授 | 黒倉 壽 岡本 研 | 2 7 5 0 0 2 8 9 2 1 |
| | 十類 動物生命システム科学専修 | 助教授 | 松本 若嗣 | 2 5 1 9 7 |
| | 経済 | 経済学科 経営学科 | 助教授 | 柳川 範之 |
| 教養 | 超域文化科学科 | 教 授 | 船曳 建夫 | (駒場) 4 6 2 3 7 |
| | 地域文化研究学科 | 教 授 | 増田 一夫 | (駒場) 4 6 3 9 2 |
| | 総合社会科学科 | 教 授 | 後藤 則行 | (駒場) 4 6 4 7 3 |
| | 基礎科学科 | 助教授 | 前田 京剛 | (駒場) 4 6 7 4 7 |
| | 広域科学科 | 教 授 | 松尾 基之 | (駒場) 4 6 5 6 8 |
| | | 助教授 | 松原 宏 | (駒場) 4 6 2 5 4 |
| 生命・認知科学科 | 助教授 | 丹野 義彦 | (駒場) 4 6 2 6 5 | |
| 教育 | 総合教育科学科 | 教 授 | 川本 隆史 | 2 3 9 3 4 |
| 薬 | 薬学科 | 教 授 | 松木 則夫 | 2 4 7 8 0 |

備考：連絡先電話番号

- 本郷 (ダイヤルイン) 5841- (内線番号の下4ケタ)
- 駒場 (ダイヤルイン) 5454- (内線番号の下4ケタ)
- 駒場・数理 (ダイヤルイン) 5465- (内線番号の下4ケタ)
- 例) 内線20000の場合 → 5841-0000

大学院工学系研究科・工学部
工学系研究科原子力国際専攻が発足

4月1日（金）、工学系研究科に新しく、「原子力国際専攻」が誕生しました。

本専攻は、東海村に本拠を置く「原子力専攻（専門職大学院）」とともに設立され、両専攻は一体となって新しい時代の原子力教育・研究を展開していきます。

「原子力専攻（専門職大学院）」が、高度な原子力関連技術者の養成を目指すのに対して、「原子力国際専攻」ではまず、広い意味での原子力科学技術を利用した高度な研究と教育の場を形成することを目指しています。ここでは「エネルギー・加速器・放射線利用」に関する最先端の基礎研究をすすめながら、これらの技術を利用し、様々な応用分野との学際領域を積極的に開拓していきます。特に本専攻の一つの特徴として挙げられるのは、医学の領域に加速器技術・放射線技術を融合させる、医学物理分野において、将来の高度先進医療の現場でリーダーシップを取れる「理工系」の人材育成を目指しています。さらに、科学技術だけではなく、国際保障学、社会工学（法工学、リスクマネジメント、技術倫理）といった文理融合型の分野にもチャレンジしていきます。

また、「原子力国際専攻」はその母体となった、旧原子力研究総合センターが維持・管理していたMALT、RAPIDなどの加速器を始めとする大型実験設備を堅持し、共同利用に供するとともに、研究・教育にも役立ちます。

「原子力国際専攻」は原子力科学技術を核としながらも、新しい研究領域の開拓を目指す意欲的な専攻です。



除幕式の様子（写真右は平尾公彦工学系研究科長、左は勝村庸介原子力国際専攻専攻長）

大学院工学系研究科・工学部
工学系研究科原子力専攻の開校式が行われる

原子力専攻の開校式が4月1日（金）、茨城県東海村にあるキャンパス（旧原子力工学研究施設キャンパス）で盛大に行われた。原子力専攻は専門職大学院で、主として社会人を受け入れる。1年間で原子力修士（専門職）の学位が与えられるほか、国家資格である原子炉主任技術者や核燃料取扱主任者の試験にも合格できるようになる。教育には日本原子力研究所や核燃料サイクル開発機構も全面的に協力する。全国的に原子力を冠する学科がなくなっていく中、これからの原子力を支える専門技術者の養成システムの構築が望まれており、それに本学が応える形で開校にこぎつけたものである。

開校式では平尾工学系研究科長、班日専攻長の挨拶に続き、橋本茨城県知事と村上東海村長それぞれご本人から来賓挨拶をいただいた。これは地元の原子力専攻に寄せる強い期待の表れである。岡崎日本原子力研究所理事長、殿塚核燃料サイクル開発機構理事長からも力強い声援の祝辞をいただいた後、専任教員、客員教員、非常勤講師に引き続いて、電力会社やメーカー、規制行政庁、研究機関から派遣された15名の新入生の紹介があった。最後は校長にあたる岡常務委員の挨拶で締めくくられた。



開校式で来賓として挨拶される橋本昌茨城県知事

開校式終了後ただちに教室に移動して、インターネット回線を用いた遠隔講義システムのデモンストレーションが披露された。原子力専攻は原子力設備を用いての実験・実習を重視することから東海村に置かれ、講義も基本的には東海村のキャンパスで行われる。だが、原子力専攻と同時に浅野キャンパスに普通の大学院である原子力国際専攻が設置されたので、浅野キャンパスにいる学生もその講義を聴講できるようにする工夫がこの遠隔講義システムである。デモンストレーションでは普通とは逆に浅野キャンパスからの講義を東海村で聴き、その便

利さを体感した。大型画面に講師の顔が映るだけでなく、さらに3つ用意された大型スクリーンにはPCプロジェクタからの出力が両教室まったく同じに投影される。講師がその場で画面上に書いた手書きの文字も同時に送られてくるのには参加者全員感心することしきりであった。

引き続き祝賀パーティが行われた。参加者からは、原子力界では久しぶりの明るいニュースだ、喜ばしいことだし今後に期待するという声が数多く聞かれた。なお、開校式の様子はNHKのニュースでも放映されたほか、いくつかの新聞でも取り上げられたので、見かけられた方も多いのではないかと思う。



原子力専攻（専門職大学院）の新入生紹介

大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校で平成17年度入学式行なわれる

4月8日（木）教育学部附属中等教育学校において、平成17年度入学式が行なわれ、第60回生120名が迎えられた。

満開の桜の下、佐藤学教育学部長、江原勉教育学部事務長、その他の来賓の方々にご出席いただき、厳かかつ温かな入学式となった。

汐見稔幸学校長は祝辞の中で、これまでの本校の長い歴史の蓄積を大切にしながら、生徒も自主的に参加して新しい学校を作り上げてほしいと述べた。

佐藤学教育学部長からは、学びには、竹のようなしなやかさと自身の考えを持ちながら他者の考えを謙虚に受け入れる開かれた心、そしてアリの様に細やかに鳥のように自由なものごとを見つめる眼が大切であると、新入生にも理解しやすい形でお話をいただいた。

松原玲子PTA会長は仲間の大切さについて手話を交えながらお話された。



祝辞を述べる佐藤学教育学部長

地震研究所

「国際地震・火山研究推進室」を開設

地震研究所では、特別教育研究経費によって4月1日（金）から「地震・火山に関する国際的調査研究」事業をスタートした。この事業を推進するために地震研究所内に「国際地震・火山研究推進室」（略称：国際室）を開設した。

地震研究所はこれまでも日本列島を中心としてアジア・太平洋地域を対象とした世界トップレベルの地震・火山研究を行ってきたが、昨今の情勢をふまえ、本事業では先進諸国との連携を一層強化するために世界の一線級の研究者を客員教授・客員研究員として招聘する。さらに今後は、全国共同利用の機能も用いながら、アジア・太平洋地域に地震研究所の研究成果を還元するなどの活動を積極的に推進し、同地域における地震・火山研究の中核研究機関となることをめざしたいと考えている。昨年暮れに発生したスマトラ島沖の巨大地震・津波を契機とした同地域の地震・津波災害からの復興事業や同地域で発生する火山活動など迅速な対応が求められる国際的活動にも対応できる体制を作っていきたい。

この事業を円滑に進めるため、国際室に教授4名、助教授2名と技術職員を置き、運営にあたっている。



地震研究所に設置された「国際地震・火山研究推進室」とスタッフ

AGS推進室

Amory B.Lovins氏講演会のお知らせ

シンポジウム・講演会

AGS推進室では、マサチューセッツ工科大学（MIT）、スイス連邦工科大学、及びスウェーデンのチャルマーズ工科大学と共に、環境保全を図りつつ地球規模での持続的発展を求める国際学術協力、AGS（Alliance for Global Sustainability）活動を推進しています。

この度、ロッキー・マウンテン研究所（アメリカ）CEOであるAmory B.Lovins氏の講演会を開催いたします。同氏は日本でも有名な「ソフト・エネルギー・パス」の提唱者であり、近著の“Winning the Oil Endgame”を基に、人間の安全保障に絡んだ石油や資源の環境問題などについて講演をして頂く予定です。

皆様のご参加をお待ちしています。

タイトル：“Winning the Oil Endgame”
ー石油のエンドゲームに勝つ

日 時：5月23日（月）15:00～18:00

場 所：小柴ホール（理学部1号館新棟2階）
定員200名

講演は英語で行われます。参加費無料（事前の登録は必要ありません）。

プ ロ グ ラ ム

司会 幸田シャーミンさん（大学院総合文化研究科）

- ・開会挨拶
住 明正 教授
（AGS推進室長・気候システム研究センター）
- ・Amory B. Lovins氏 講演
“Winning the Oil Endgame”
ー石油のエンドゲームに勝つ
- ・パネル・ディスカッション
Amory B. Lovins氏とAGS UT Student Community
メンバー
- ・閉会挨拶
武内 和彦 教授（大学院農学生命科学研究科）

詳細はAGSのHPをご覧ください。

<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/ags/2005/lovins.htm>

（問い合わせ）

AGS推進室

Tel：03-5841-7937（内線27937）

E-mail：shimazaki@esc.u-tokyo.ac.jp

大学院総合文化研究科・教養学部

教養学部進学情報センター主催シンポジウム

シンポジウム・講演会

「私はどのような大学時代を送ったか」

日 時：5月27日（金）13:00～17:00

会 場：教養学部学際交流棟3階学際交流ホール

各学部の先生を講師にお招きし、先生が学生時代をどのようにして過ごされたのかを個人的な体験をもとに語っていただくことを計画しました。現在の専門分野や職業を選ばれた経緯や、専門分野の魅力・将来像についても話していただこうと思います。このシンポジウムが、学生時代の意味を問い直し、より広い視座から後期課程への進学を考える契機になればと願っています。

先生方との質疑応答の時間も予定しています。ぜひ参加してください。講師の先生方の所属、氏名（専門分野）、演題は以下の通りです。

法学部 藤原 帰一 教授（政治学）

「政治と文学の間」

医学部 井原 康夫 教授（神経病理学）

「大学紛争の頃」

工学部 新井 民夫 教授（知能システム学）

「ヒッチハイカーが大学に残るまで」

文学部 塚本 昌則 助教授（フランス文学）

「自分の場を求めて」

理学部 田仲 加代子 講師（生物化学）

「スタイルは決めずに」

農学部 松本 雄二 助教授（木材化学）

「学問の実感を求めて」

経済学部 粕谷 誠 教授（経営学）

「自分なりの個性と進路」

教養学部 長谷川 壽一 教授（認知行動科学）

「自分探しの旅ー終着駅はサルだったー」

教育学部 南風原 朝和 教授（教育心理学）

「心理学に惹かれて統計学に出会う」

薬学部 新井 洋由 教授（機能薬学）

「私は大学院から勉強を始めた」

※シンポジウムの最後に、進学情報センターより進学振分けの説明会を行います。

（問い合わせ）

教養学部進学情報センター

里見 大作 教授（内線46187）

大学院総合文化研究科・教養学部
特別企画展示「王朝貴族の装束展」のお知らせ

お知らせ

5月17日(火)から6月12日(日)まで、本学部美術博物館において、史料編纂所と高田装束研究所の協力をえて、特別企画展示「王朝貴族の装束展—衣服を通して見る文化の国風化—」を実施致します。開館時間は10時から18時。但し入館は17時30分まで。毎週月曜は休館。また、期間中の5月27日(金)、14時から15時半の間、学際交流ホールで装束研究家高田俊男氏(高田装束研究所)による平安朝復元装束の着装と解説も行われます。

本美術博物館には、元来文学部考古学研究室に保管されていた大正天皇即位時の装束が譲り渡され、相当数存在致します。これを素材とし、史料編纂所所蔵の絵画・典籍類を加え、日本における衣食住(日常生活)の歴史を貴族の衣服を中心に、解明して展示しようとするものです。

全体は3部構成とし、第1部では、奈良時代までの衣服の歴史を、食住とともに、埴輪・壁画・正倉院宝物などに基く復元模型の写真パネルなどを展示し、大陸文化の影響の大きさを解説します。

第2部では国風化が始まる平安前期から近世までを扱い、平安中期国風文化とともに完成する柔装束、平安末期以降角張ってくる強装束、中世から近世へ変容する装束の姿などを、それぞれ食住とともに、絵巻物や典籍などで展示し、国風化やその変容の意味を解説します。そして最後に、近世末期の国学興隆などを背景に、国風時代の装束が、擬古的に再生されることを説明します。

第3部では、大正天皇即位時の装束群がこの復古の延長線上にあることを説明しながら、本館所蔵の装束に、同時期に調製された装束を高田俊男氏から借りて、それらを人形に着装させたり、衣桁にかけたりして展示します。

このように本展示は、衣服という日常生活レベルのモノを通して、日本の文化と歴史を再構成し、近代以降の日本の伝統が、国風時代からの単なる継続ではなく、それを意識的に再創造する営みであったことを明らかにしようとする一つの試みです。

大学院総合文化研究科・教養学部
教養学部オルガン演奏会開催のお知らせ

お知らせ

教養学部では、恒例のオルガン演奏会を次のとおり開催いたします。入場は無料です。ホームページ(<http://organ.c.u-tokyo.ac.jp>)を開設しておりますので、ぜひご覧下さい。

第103回オルガン演奏会《隔たりを超えて》

1978年以来おもに日本を活躍の場となさっているドイツご出身のオルガニスト、マイヤー=フィービヒさんをお迎えし、時空を自由に天翔るオルガン曲の数々をお楽しみいただきます。どうぞご期待下さい。

日 時：5月26日(木) 18:30開演(18:00開場)

場 所：教養学部900番教室(講堂)

曲 目：N・クレランボー

「第1旋法の組曲」より

グラン=プラン=ジュ・フーガ

T・マイヤー=フィービヒ

インヴェンション

オルガンのための6つの小品

オルガンのための4つの間奏曲

高田三郎

「ピアノのための5つの日本民謡」より

子守り歌

かくま刈り

G・ムッフアト

トッカータ 第3番

H・シャイデマン

「人よ、至福の生を望むなら」

J・アラン

モノディー

鳴り響く二つの音による子守歌 (op.2)

フリギア旋法によるバラード

J・S・バッハ

前奏曲とフーガ ハ短調 (BWV 549)

演 奏：トーマス・マイヤー=フィービヒ(オルガン)

第104回オルガン演奏会《Playing with Fire》

コリン・アンドリューズさん、ジャネット・フィッセルさんご夫妻をお迎えし、息の合った連弾と独奏によ

るオルガン曲の数々をお楽しみいただけます。どうぞご期待下さい。

日時：6月2日(木) 18:30開演(18:00開場)

場所：教養学部900番教室(講堂)

曲目：M・M・イポリートフ=イワノフ

「コーカサスの風景」より

酋長の行進 (op.10)

J・S・バッハ

パッサカリアとフーガ ハ短調 (BWV 582)

「オルガン小曲集」より

「おお人よ、汝の大なる罪を悲しめ」

前奏曲とフーガ ト長調 (BWV 550)

P・I・チャイコフスキー

バレエ組曲「くるみ割り人形」より

アラブの踊り

J・S・バッハ

プレリュードとフーガ 変ホ長調 (BWV 552)

P・エベン

「ファウスト」より

グレートヒェン

「日曜日の音楽」より

モート・オステynaート

C・サンサーンス

「サムソンとデリラ」より

バッカナーレ

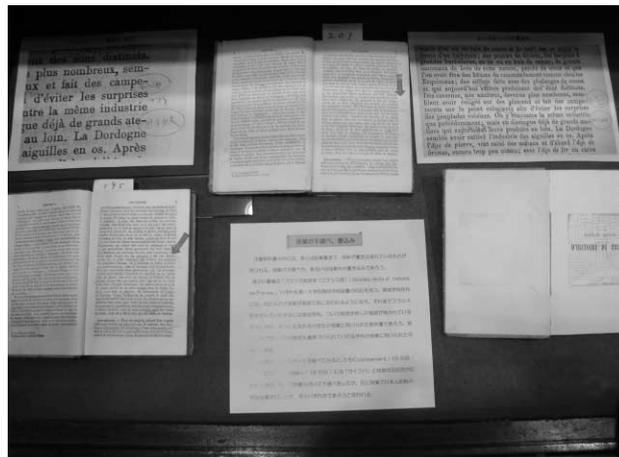
演奏：コリン・アンドリューズ (オルガン)

ジャネット・フィッシャー (オルガン)

今回、そのうち貴重な49点を、印記が語る東京大学史、福沢諭吉による洋書輸入、慶應義塾の洋書教科書、書籍の買入れ先、リーダーの時代、授業の下調べ・書き込み等、小見出しを付け展示しています。

これらの教科書は、明治初年の洋学の受容を研究する上できわめて有益な資料であり、これを機に、多数の方にご覧いただければ幸いです。

なお、今回の展示にあたって、人文社会系研究科・文学部の月村辰雄教授のご指導をいただきました。



授業の下調べ書き込み例



展示風景

附属図書館

常設展「東大初期洋書教科書の世界」開催のお知らせ

お知らせ

総合図書館では、4月から6月まで標記の常設展を3階展示コーナーで開催しています。

東京大学の前身である大学南校、第一大学区第一番中学、開成学校においては、語学はもちろん哲学から数学・物理学にいたる当時の欧米諸国の中等教育課程が、外国人教師によって直接英語・フランス語・ドイツ語で教えられました。それは、アメリカのハイ・スクールやフランスのリセなど、欧米の中等教育機関の教科書をそのまま用いた授業でしたが、総合図書館には東京大学の前身諸校で明治初年に実際に使用された洋書教科書が約1500冊ほど残され、当時の学生たちの書き込みや落書きを今に伝えています。

総合研究博物館

公開セミナー「関野貞アジア踏査」開催のお知らせ

シンポジウム・講演会

総合研究博物館では、6月4日(土)から開催する特別展示『東京大学コレクションXX 関野貞アジア踏査一平等院・法隆寺から高句麗古墳壁画まで』展に関連した公開セミナー「関野貞アジア踏査」を下記のとおり開

催いたします。

公開セミナー「関野貞アジア踏査」

本講座は、同名の東京大学コレクション展（第XX回）の関連企画としておこなうものです。100年ほど前に関野貞が発見し調査した日本、韓半島、中国大陸の文化遺産、その後の保護施策、研究の進展、現在の状況などにつき広い視点から考えてみます。

- 講座期間：6月10日（金）～7月8日（金）
毎週金曜日15:00～17:00（全5回10時間）
- 会場：総合研究博物館・展示ルーム内講義室
- 受講料：5,600円
- 定員：60名

[総合担当教員] 西秋良宏（総合研究博物館助教授）

[講義内容・講師]

- 第1回 6月10日（金）「関野貞と日本建築史研究」
藤井恵介（工学系研究科助教授）
- 第2回 6月17日（金）「関野貞の考古学的研究」
早乙女雅博（人文社会系研究科助教授）
- 第3回 6月24日（金）「関野貞の平城宮発見」
吉川聡（奈良文化財研究所文化遺産研究部主任研究官）
- 第4回 7月1日（金）「壁画保存から見る関野貞と関野克」
毛利和雄（NHK解説委員）
- 第5回 7月8日（金）「関野貞の韓国古蹟調査」
韓三建（韓国 蔚山大学建築学部教授）

7月9日（土）に同展示と関連した公開シンポジウム『関野貞の実像』を開催予定です。詳細は下記博物館ホームページをご覧ください。

[応募方法]

往復葉書を用い、往信部分に1講座名、2郵便番号・住所・氏名、3電話番号、4年齢、5職業を、返信部分に1返信先の郵便番号、2住所、3氏名を明記の上、下記募集期間中にお申し込みください。受講料の納入方法等については返信葉書にてお知らせいたします。なお、応募者が定員を超えた場合抽選とさせていただきます。

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
東京大学総合研究博物館 事務室 公開講座担当 宛

[応募締切] 5月20日（金）当日消印有効

総合研究博物館では下記のとおり展示を公開しています。

特別展示『東京大学コレクションXX 関野貞アジア踏査—平等院・法隆寺から高句麗古墳壁画まで』

- 会期：6月4日（土）～9月4日（日）
- 休館：月曜休館（但し、月曜祝日の場合は会館し、翌日休館）
- 時間：10:00～17:00（入館16:30まで）
- 場所：総合研究博物館 1階新館展示ホール
- 備考：入場無料

（問い合わせ）
ハローダイヤル：03-5777-8600
ホームページ：<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/>

低温センター 保安教育「低温講習会」のお知らせ

お知らせ

液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象にした講習会を下記の要領にて開催いたします。この講習会は高圧ガス保安法で義務づけられている保安教育の一環として行うものです。対象者は、主として今年度入学の修士課程一年生等新たに寒剤を利用し始める学生及び教職員です。研究室の該当者は、必ず出席するようにお願いいたします。

なお、申し込み方法は低温センターのホームページ（<http://www.crc.u-tokyo.ac.jp/>）をご覧のうえ、5月13日（金）までにお申し込みください。

日時：5月20日（金）15:00～17:00

場所：理学部化学本館5階講堂

講習内容：

- ・高圧ガス保安法の概要
- ・高圧ガス容器の取り扱い方
- ・液体窒素・液体ヘリウムの特性と取り扱い方
- ・実際の利用手続き、事故例の紹介
- ・共同利用装置について

連絡先：低温センター技官室（内線22862）

本年度の週間診療日程は、次表のとおりです。

本郷支所
平成17年4月1日現在

| 曜日 | | 時間 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 備考 |
|--------|----|-------------|--------------|-----------------|-----------------|--------------|-----------------|--|
| 診療科・室 | 午前 | 10:00～11:45 | 土肥 | 藤澤 | 上床 | 奥田 | 藤澤 | ※1 第1・3・5週 ※2 第2・4週 |
| | 午後 | 13:15～15:00 | 藤澤 岩澤 | 鈴木 木村※2又は辻※1 | 上床 三好※1/和田※2 | 奥田 岩澤 | 藤澤 柳瀬※1/富谷※2 | |
| 歯科口腔外科 | 午前 | 10:00～12:00 | | 片桐 | 大木 | 大木 松崎(隔月) | | 予約制(受付は随時) 2ヶ月に1回木曜午前 専門医による矯正相談 |
| | 午後 | 13:10～15:00 | | 末永 | 宮路 | 藤原 | 波田野 | |
| 耳鼻咽喉科 | 午前 | 10:00～12:00 | 狩野 | | 岩崎 | | 狩野 | |
| | 午後 | 13:15～15:00 | 狩野 | | 狩野 | | | |
| 精神神経科 | 午前 | 10:00～12:00 | 佐々木 | 佐々木 丸田 | 佐々木 坂本 | 丸田 | | 予約制(受付は随時) |
| | 午後 | 13:00～16:00 | 佐々木 丸田・坂本 | 湊 | 福田 | 藤村 | 丸田 | |
| 放射線室 | 午前 | 9:30～11:45 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | |
| | 午後 | 13:15～15:00 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | 直接撮影 | |

駒場支所
平成17年4月1日現在

| 曜日 | | 診療時間 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 備考 |
|-------|----|----------------------------------|-----|-------------------|----|----------------|----|---------------------------|
| 診療科・室 | 午前 | 10:00～12:30 | 上原 | 安東 | 張 | 石川 | 安東 | 受付時間12:15迄 |
| | 午後 | 14:00～16:00 | 上原 | 石川 安東 | 張 | 石川 | 張 | |
| 歯科 | 午前 | 10:00～12:00 | 大木 | | | 松崎 矯正2ヶ月に1回 | | 予約制 2ヶ月に1回木曜午前 矯正相談 |
| | 午後 | (月)13:15～15:15 (金)14:00～16:00 | 大木 | | | | 青柳 | |
| 整形外科 | 午前 | 10:00～12:00 | | | | | 渡会 | 受付時間11:45迄 |
| 皮膚科 | 午後 | 14:15～15:45 | | 佐々木(苗) (第2火曜日) | | | | 受付時間15:30迄 |
| 精神神経科 | 午前 | 10:00～12:40 | 坂本 | 坂本 | 高橋 | 佐々木(司) | 坂本 | 予約制 |
| | 午後 | 13:40～16:00 | 伊集院 | | 滝川 | 佐々木(司) | 坂本 | |

柏支所
平成17年4月1日現在

| 曜日 | | 時間 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 備考 |
|-------|----|-------------|---------------------|---------------------|---------------------|----------------------|---------------------|---|
| 診療科・室 | 内科 | 午前 | 福田 (10:00～13:00) | 福田 (10:00～13:00) | 福田 (10:00～13:00) | 根来 | 根来 | |
| | | 午後 | 福田 (14:00～15:00) | 福田 (14:00～15:00) | | 根来 | 根来 | |
| | | 15:00～16:45 | 上床 | | 奥田 | | 土肥 | |
| 精神神経科 | 午前 | 10:00～12:00 | 福田 (10:00～13:00) | 福田 (10:00～13:00) | 福田 | 福田 | | 精神神経科は予約制です (予約受付は随時) ※第1木曜日(肥田先生) は休診 |
| | 午後 | 14:00～15:00 | 福田 | 福田 | | ※肥田 (13:30～16:30) | 富永 (13:30～15:30) | |

金融の新専攻・センターの誕生

この4月に経済学研究科に「金融システム専攻」と「金融教育研究センター（CARF）」が正式に発足した。この2つは連携して、世界トップ水準の金融研究の推進と研究者の養成をめざしている。新専攻とセンターの最大の特色は、従来の「枠」にとらわれない研究・教育活動を進めることである。

「枠」の第1は、「ビジネススクールと経済学部」の枠である。資産運用、企業金融などの金融戦略は、欧米の大学では主としてビジネススクールで教えられている。こうした金融戦略を対象とする研究・教育についても経済学のディシプリンを重視した取り組みをして行く。第2は、「文科系と理工系の枠」にとらわれないことである。金融は、経済学の中でも数学、統計学や計算科学を多用する分野であり、理工系の学部出身者も積極的に受け入れて行く。第3は、「国籍の枠」にとらわれないことである。幅広く世界中から優秀な研究者、学生を積極的に迎える。英語で行われる授業の数も少なくない。そして、第4は、「学



界と産業界の枠」にとらわれないことである。いわゆる産学連携施設であるCARFでは、実務家研究者も迎えて各種の共同研究プロジェクトを進める。

現在、金融研究は新しい地平が開けようとする段階を迎えている。資産価格理論の精緻化が進み、市場取引のマイクロストラクチャーや企業金融理論の研究の進展によって従来謎とされてきた事柄が徐々に解明されつつある。他方で、狭義の合理的行動を仮定した従来の理論的枠組みから一步踏み出そうとする行動ファイナンスや実験ファイナンスの研究も盛んである。こうした理論的な研究の一方で、秒単位の取引データや途上国市場を含めた国際的な市場データの整備が進み、膨大なデータ・ベースを用いた実証研究も精力的に推し進められている。

従来、こうした最先端の金融研究はアメリカの大学を中心に進められてきたが、近年ではヨーロッパの大学の台頭が目立ってきた。われわれも負けてはられない。生まれたばかりの新専攻とCARFであるが、われわれの夢は大きい。

新井 富雄（大学院経済学研究科）

（淡青評論は、学内の職員の方々にお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔訂正〕

「学内広報」において、一部誤りがありましたので、訂正してお詫びします。

No.1310 (2005.3.23)

13ページ左段40行目 (誤) 昭和4年4月 → (正) 平成4年4月

13ページ左段41行目 (誤) 昭和12年7月～昭和14年3月 → (正) 平成12年7月～平成14年3月

13ページ左段42行目 (誤) 昭和14年4月～昭和17年3月 → (正) 平成14年4月～平成17年3月

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1312 2005年4月27日

東京大学広報委員会

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学総務部広報課 ☎ 03-3811-3393
e-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
ホームページ http://www.u-tokyo.ac.jp/index_j.html



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO